

【研究ノート】

ウィーン産業技術博物館の設立過程と今日

Museum of Technology, Vienna –the short history of its foundation and a glance at today–

前原 雅子

Masako MAEHARA

世界遺産として良く知られているシェーンブルン宮殿の正門前から真っ直ぐ伸びる宮殿並木路を進むと、路面電車では一停留所の距離であるが、「ウィーン産業技術博物館（Technisches Museum Wien）」の敷地が右手前方に現れる。この並木通りと交差するマリアヒルファー通りの西端にあたり、建物はこの通りに面して東西方向へ横長に建てられている。通りの交わる角度から敷地は東を上底、西を下底と見なせば高さのある細長い三角形に近い台形をなしていると言えよう。このマリアヒルファー通りを更に東北東に遡ると東端はウィーン中心部を環状に囲むリング通りに帰着する。現在では交通量の激しいこの一帯だが、博物館計画がいよいよ本格化した当時の最初の鳥瞰図的な建物の水彩画では、背後には蒸気機関車がのどかに走る風景が描かれていた。ザルツブルクやインスブルックなど西方面へ向かう鉄道の起点である西駅から約1.5 km程の距離に位置している。

建物は当時本省の役人で建築家でもあったエミール・リッター・フォン・フェルスター（Emil Ritter von Foerster, Ritterは称号）の下図を基に彼が亡くなった後、コンテストによって選ばれたハンス・シュナイダー（Hans Schneider）の設計図によって完成したものだが、このコンテストにはオットー・ヴァーグナー（Otto Wagner）やアドルフ・ロース（Adolf Loos）など有名な建築家を含め27人が参加、24の草案で競われたそうである（2名の共同制作が3組）。しかし、現在は1992年から1999年の間に行われた総合修復による増改築部分もあり、創建当時とはやや異なった印象を呈している。1918年に開館した当時の博物館の正面入り口は、その時代の多くの博物館がそうであった様に、神殿を思わせるかのような4つの大柱間の階段が内部へ誘う形式であったと写真から見て取れる。博物館自身がその展示案内書で「それまでの設立構想と別れを告げた」と明記しているように、これを契機に日進月歩する科学技術に即した展示並びに現代社会の意識に適した展示収集へとそのコンセプトを一新したのである。それゆえ老朽化した建物の修繕過程で現代に適した基礎設備の投入は自明の如く、新スタートとも言えるような意識

平成19年6月18日受理

的改革も関与した為、総工費約5億シリング（現在の通貨に換算すると約3600万ユーロ）という高額な予算が投じられ大幅な改造を見た。それでも当初の計画からすると資金が不足し縮小を余儀なくされたと言う。数点の大型展示品を除く全展示品は当然のことながら一度外部へ保管の為移され、約7年少々の間博物館は閉鎖されていた。博物館の新しい入り口は以前の南正面玄関の前庭部分を掘り下げ地階を作り、その空間を外壁から続くガラス壁で囲う形式の新しいロビーを出現させたので、来館者は外壁に沿ったスロープ、または金属製の階段を下りて入館するようになった。それによって昔のエントランスから内部へ至る柱廊玄関ホール部分は、現在はカフェ・レストランのスペースとして利用されている。この大改造は昔の威厳ある美しいファサードを知る人々には感傷的な思いを与えているが、新しい世代の若者達には抵抗無く受け入れられている。これだけの大掛かりな工事が遂行されたのも、1980年代に入り博物館に対して「ムゼウムスミリアーデ（博物館に対する10億（シリング））」というスローガンのもとに行われた文化政策のお蔭である。因みにウィーン自然史博物館ではこの恩恵により屋根部分を改造して新しく研究室と収蔵室を設える事に成功しているが、外観には全く影響を与えず古い建物に最新の機能を持たせたところが大きな違いであろう。



写真1 産業技術博物館の旧来のファサードに増築された入り口部分

「ウィーン産業技術博物館」は「ドイツ博物館」や「ロンドン科学博物館」、またフランスの「科学産業都市」、アメリカの「シカゴ科学産業博物館」程には我国において知られていないように見受けられる。或いは「ドイツ博物館」の影響による設立というような取り上げられ方も少なくない。もちろん当時の先行する「ロンドンのサウスケンジントン博物館」や「パリの工芸学院」の大きな影響、並びに「ミュンヘンのドイツ博物館」に関しては特に最も近いお手本となる博物館であったことは明白である。開館に至るまで創立の尽力者とドイツ博物館のオスカー・フォン・ミラー（Oskar von Miller, 1855-1934）との間で非常に緊密な意見交換が何度となく行われたことは博物館発行の展示案内書中に記された「博物館の歴史」にも言及されているが、それにも増して館独自の複

雑な成立事情がそこから読み取れるのである。この案内書を中心に博物館併設の図書館で得た参考資料も交えながら「ウィーン産業技術博物館」の成立事情とその過程を紹介し、更に現在の状況にも若干触れてみたいと思う。

現在の「ウィーン産業技術博物館」の創設を実現した尽力者、ヴィルヘルム・フランツ・エクスナー（Wilhelm Franz Exner, 1840–1931）は、教育者として大学学長も歴任し、技術者としては「エクスナー法」に名を残し、また帝国参議院議員や後に枢密顧問官も務めるなど、その広範囲にわたる数多くの業績に比べ、今日では当地においても一般の人々にその名前は殆ど知られておらず、また話題にされる事も少ないようである。ここでは博物館関係のみを扱うが、現オーストリアで車検等の監督機関である技術監査協会（TUeV）の基礎作りにも貢献している。彼の伝記を垣間見ると、その業績は簡単に概観できるものではないが、彼の熱意とエネルギーには誰もが敬服させられるであろう。

「エクスナーが自国に大規模な産業技術博物館を開設したいと言う信念を強くした契機となったのは1867年に訪れた『パリ万国博覧会』であり、その後もその構想が脳裏から離れず」と展示案内書に記されている。また、オーストリア工業協会がエクスナーの業績を称えて設立した「ヴィルヘルム－エクスナー－メダル」の80周年記念出版物によると「1862年のロンドン万国博覧会に学位を取得したばかりの22歳の彼は企業の奨学生として、その科学技術的知識（幾何学、建築学、機械工学を修得）の他に英語とフランス語に優れていた事も評価され同行し、この語学の才能はその後彼が政治や経済の分野において緊密なネットワークを形成できた一因となった」ことが分かる。因みにオスカー・フォン・ミラーもこのメダルの受賞者である。いずれにしてもこれらの万国博覧会が彼に与えた影響は大きく、産業技術博物館構想に対する熱意が言わば畢生の仕事となっていくのであるが、それ以前にいわゆる博物館の前身とも言えるハプスブルク帝国時代の皇帝によるこの種の収集品に触れておくのが年代的にも順当であろう。

展示案内書の既述では、1807年9月11日にオーストリア皇帝フランツ I 世（Franz I）の親書により、皇帝の収集品を基礎に「工業製品展示室（Fabriksprodukten－Kabinett）」が創立され、その趣旨は「『見本及び卓越した工業製品』という一種のコレクションの設立は現在の状況において、『この仕事の中で一層完全になったものと同様に徐々に進歩している有益な工芸のすべての中から、特徴的な見本の展示を通してその概要とそれによる国内産業の文化段階におけるひとつの像をもたらす為』という特定の目的を持っていた。」（『は原文中のもの）とある。そして個人の邸宅に収納されていたそれらの最初の暫定的な収集品は、やはり皇帝のもとに創設されていた「物理学・天文学展示室」と今日のウィーン工業技術大学の前身である総合技術学校に1815年に統合されたと続いている。この「物理学・天文学展示室」とは、自然史博物館の歴史を見ると一時期、組織統一された「帝国物理学及び天文学、人工及び自然動物標本展示室」が、その後再編され名称を「総合博物標本及び物理学・天文学展示室」と変え継続、しかし、1806年に「博物標本室」と「物理学・天文学展示室」に分離したので、その一方にあたる展示室と思われる。また、総合技術学校に関しては1817年にヨーハン・ヨーゼフ・プレヒトル（Johann

Joseph Prechtl) によってまとめられた定款によると「この学校は工業技術的な教育施設であるだけでなく、初めて『工業（科学）技術博物館（Technisches Museum）』と名付けられた工業と産業の為の教育機関として、また一種の国家工業産業助成の為の協会でもあると理解される。」とある。このあたりの文章は複雑で具体的な設計図が掲載されていないので、理解にやや窮するが、前後の脈絡から推測すると展示品は教育機関を助ける重要な資料であり、学校と博物館の結びつきは非常に強く、併設というより一体化されているような印象を受ける（このような博物館と学校の一体例は、その趣旨は異なるものの1857年に開館したロンドンのサウスケンジントン博物館の見取り図にも見られる）。更にここで初めて「工業（科学）技術博物館」という表現が登場したとのことである。この時の収集品としては、工業技術的部門は「化学的な薬品（或いは薬剤標本か?）」と「工業製品収集品」、「数学展示室」、「物理学展示室」、「模型収集品」、「数学及び機械装置的工房」、「工業製品展示室」、一方、商業・商品的部門は、「商品学（或いは単に見本品か?）展示室」、「実科学学校の標本室」、「地図コレクション」が含まれたという（括弧内は筆者による）。これらの収集品の収蔵目録は1816年に6000件、1829年には30,000件に上り、さらに1840年代には、皇帝フェルディナント I 世（Ferdinand I, 前出の皇帝フランツ I 世の嫡子）が生産品を収集した「工業技術展示室（Technisches Kabinett）」に他の収集品も加わり「科学技術展示室（Technologisches Kabinett）」への統合に至ったと記されている。そして、その展示品の中から1912年の末に「ウィーン産業技術博物館（当時の正式表記としては Technisches Museum fuer Industrie und Gewerbe in Wien）」としての建物が完成した時に、19,311品目、44,341個が収蔵目録から処分され、博物館に貸し出される事になったそうである。

ここでドイツ語の単語の意味と表現について少々触れておきたいと思う。書籍・資料中に頻出する Technik 及び Technologie の訳語についてであるが、現代において Technik は主として「科学・工業技術」をさし、Technologie も同様な意味合いであるが「応用科学や専門技術」を意味する場合もあり、一般的には技術工学など学問分野の意味合いも強いようである。その形容詞 technisch, technologisch も含めて見ると、「Technische Universitaet Wien（ウィーン工業技術大学）」のような使用例もあり、オーストリアにおいては両方とも学問領域も包括しているように見受けられる。ここ200年程の間に大きな意味の変遷があるとは思われないが、戦後の科学技術の目覚ましい発展によって若干の包括内容の差が生じているかもしれない。もちろん Technik に関しては芸術やスポーツにおける技術、すなわち技法・手法また技巧の意味も含むが、当時における博物館との組合せ或いは結合において、その両者（Technik と Technologie）の区別を明確にするのは大変難しく、いずれも大きな相違が見られないことから、双方とも「工業技術」、或いは「科学技術」との訳語をあてた。また、登場頻度の高い単語に Gewerbe があるが、この語の意味範囲は文の内容・状況に従って限定される場合もあり一言での説明が難しいものの、総括的には「生業（公務員や教師などの職業を除く）」をさし、特に「手工業的分野で原料の加工に限定されるような仕事をさしている」と見受けられ、機械を使用した場合も小規模な形態と察せられる。ちなみに Handel und Gewerbe で商工業を意味する。一方、同様の頻出語に



写真2 皇帝の陳列室を髣髴させる歴史的収集品

「Technisches Museum Wien」という正式名称が示すように、博物館で扱っている展示品は、重・軽工業を含む機械工業と手工業、並びに郵便・通信などの職業的分野、さらに鉄道を始めとする交通関係も含むものとなっていた。現在の名称は単に「Technisches Museum Wien」に留まり展示コンセプトも新しくなっている（後述）が、基本的な収集品において徹底的な変化があるようには見えない。しかし、「Technisches Museum Wien」からは「ウィーン工業（或いは科学）技術博物館」と訳出されるのが適切かもしれないが、その経緯を考えると「産業」という言葉が含まれる方が明確であろうし、種々の印刷物上にも「産業技術博物館」の邦訳が与えられている事情も鑑み、筆者もそれに従っている。

話を再び産業技術博物館設立の功労者エクスナーに戻すと、彼は帝国農業大学の機械工学の教授として教鞭をとっていたが、材料試験制度や規格統一制度に関する科目のみならず、同時にオーストリアにおける展示会や博物館に関する分野の教授でもあったと記述されている。皇帝フランツ・ヨーゼフ I 世（Franz Joseph I, 1830–1916）の治世25周年を記念して1873年に開催された「ウィーン万国博覧会」、これは我国における明治維新後の初の公式参加事業でもあったが、「この枠組みの中で『オーストリアの工業と発明に関する増補的展示会』を企画実行し、彼の考えではこの内容豊かな文書類も含む収集品を（将来の）工業と発明の歴史を扱う産業技術博物館の為の設立基礎としてもらい受けることを希望していたが実現しなかった」そうである。それから数年後の1879年に、彼はニーダーエステライヒ州の工業協会の援助を得て、オーストリア初の高度な工業技術の教育施設であり、博物館としての機能も兼ね備えた「科学技術的産業博物館（Technologisches Gewerbemuseum）」をついに設立することが出来た。重点は木材工業技術と科学技術制度の領域に置かれていたとある。その十数年後の1893年に、彼は再びニーダーエステライヒ州の工業協会の援助を得て、今度は「オーストリア仕事の歴史博物館（Museum der Geschichte der oesterreichischen Arbeit）」を設立する事に成功した。ウィーンから北東へ30

Industrieもあるが、これは前者が中世から続く概念で、手工業等を含んでいるのに比べ、フランス語からの外来語であり産業革命後使用頻度が高くなった様子で、ドイツ語としては主として工業を意味し、中でも特に近代的で大規模な機械工業をさしている。広い意味での産業に属する農・林・水産業は基本的に両単語には含まれないようである。

現在のウィーン産業技術博物館は元来の「Technisches Museum fuer Industrie und Gewerbe in

k m程離れた当時の郊外の要所、ゲンゼンドルフ駅の駅長の息子として幼年時代を過ごしたエクスナーにとって、科学技術は身近な存在でありその重要性を早くから認識していたに違いない。さらに年月を重ねるうちに、人類に有益な発展を願うと同時にその歴史もおろそかにしてはならないという意識が生まれたものと推測される。

ところで、エクスナーによる博物館設立と平行してこの時期に、同種の領域において帝国博物館も含め幾つかの館が登場している。1885年「帝国オーストリア鉄道歴史博物館 (k.k. Historisches Museum der oesterreichischen Eisenbahnen)」(k.k.はオーストリア帝国を意味する)、1889年には「帝国郵便博物館 (k.k. Postmuseum)」、更に1890年「衛生博物館 (Gewerbe-hygienischens Museum)」と続いたが、何れも組織的に分離しておりウィーン市内に散在していたので、これらを一つ屋根の下に統一して展示しようとする理念も産業科学博物館設立への大きな原動力の一つであったらしい。1908年にウィーンで予定されていた皇帝フランツ・ヨーゼフ I 世の治世60周年記念祭で科学工業関係の優れた成果を示す展示が演出されるはずであったが、折から既に準備が進んでいたプラハで開催される予定の「産業博覧会」と競合する恐れがあった為、政治的配慮から実現が難しくなったとある。しかし、この事がかえって一過性の記念展示ではなく、それ以前から永続的機関としての工業・産業技術博物館の設立を主張していたエクスナーの着想が再び取り上げられる動因となったようである。1907年6月には3つの産業団体及びニーダーエステライヒ州の工業協会、並びに電気工学協会からの代理人による構成で、早くも「ウィーンにおける重工業と軽工業の為の科学技術博物館創設準備委員会」が設立され、会長には企業家のアルトゥール・クルップ (Arthur Krupp, 1856-1938) が選ばれた。彼は首都ウィーンから南南西へ約37 k m程下った郊外のベルンドルフ、ここはアルプス山脈の東裾野にあたるが、この地で工場を経営する篤志家としても知られた人物である。ここでウィーン産業技術博物館の産業界からの尽力者であるクルップについて若干の紹介を挟みたいと思う。

ドイツから当地へやって来た父親ヘルマン・クルップ (手元の資料には明記されていないがドイツの製鉄鋼業一族の関係であると推測される) の設立した金属工場の後を継いだアルトゥールは、工場で働く従業員のために快適な住居環境をめざし、その地域一帯の街づくりに私財を投じ、生活基盤事業は言うまでもなく住宅を始め教会や劇場も建設し、中でも向かい合う2つの公立学校はヨーロッパ内でもその内装の美しさと独自さで知られている。各教室は世界史上重要な建築様式 (エジプト、ドーリア、ポンペイ、イスラムからロマネスク、ゴシックを経てロココ様式まで12種類) を取り入れ、殆どが実在する建築を手本とした内装であるという。当時の新聞記事によると最新の技術を駆使した水道・暖房等の設備や他の学校に見られない保健室の併設も評価されたようである。現在も引き続き使用されているこの校舎は、日曜・祭日及び休校期間中には一般公開されているので、筆者もかつて見学した事があるが、このような博物館を思わせる雰囲気の中で学校生活を送ることが出来る生徒達は大変幸運に思え、また教育上の効果も高いに違いないと感じた。これらの例からも分かるように非営利事業に熱心な彼の性格から、産業技術博物館の準備委員会の責任者としての役割を果たすだけでなく、設立時の呼びかけに応じた寄

付に続き、その後も高額な寄付金で博物館を支え、また当時すでに博物館展示品としての価値が高かったと推測されるグラム発電機などの寄付も行っている。この発電機は、1873年に行われたウィーン万国博覧会に「Société des machines magnéto-électriques Gramme」から出展された品で、当時17歳のクルップが魅了され購入し、1874年から1895年迄彼の工場でガルヴァーニ式による銀鍍金（めっき）に貢献したと伝えられており、現在も産業技術博物館内に展示されている。昨年2006年には彼の「生誕150年記念展示」がベルンドルフの郷土博物館で開催され、企業関係の業績と並びウィーン産業技術博物館との関係を示す展示も見られた。



写真3 現在はカフェ内に位置する設立の尽力者エクスナーの胸像

設立準備委員会がどうにか誕生する迄に至ったが、国の助成金は総費用の約30%（当時の通貨で約150万クローネ）であり、自治体としてのウィーン市は

敷地の形はやや不定形ではあるものの建設用地と100万クローネを補助金として用立ててくれたが、残りはすべて寄付金で工面されなければならない状態であったと言う。翌年1908年にはこの委員会は「ウィーンにおける産業と工業の為の技術博物館設立作業委員会」と名称を変え、この時期に作業委員会は172頁に及ぶA4版よりやや小さい（縦27cm×横18cm）大きさの一冊の本を出版している。クルップによる短い序言とエクスナーによる長い序文の日付は1908年の8月となっているこの本の内容を、筆者は実際概観したが、ウィーン産業技術博物館創設の意義や具体的な綱領・計画の他に、手本となる先行博物館の事例が写真を豊富に伴い掲載されている。特にドイツ博物館が重点的に取り上げられている事は言うまでもないが、産業技術に限定せず芸術も含む広い領域に亘っており、国内並びに諸外国の博物館、就中にフランスの博物館が多数紹介されていた。この出版は博物館設立の重要性を一般に知らせる為の、いわゆる宣伝効果的役割も期待されたい。

中心的理念は「産業や工業の技術工学的進歩を目に見えるような分かりやすい形で表現し、新しい研究成果を通じての補足を可能にし展示は常に時代遅れにならない状態を保つ事と、更に展示品は単品ではなく一連の完全な製品を呈示することを重視し、作業方法や作業工程を具体的に

見せる。並びに収集品は品物に限らず、書籍及び説明書を含めた出版物類も収集されるべき」とあり、一方「オーストリア起源の収集品は優先されるべきで、非自国由来展示品は技術発展の歴史上意味を持つ産業技術的製品として適している場合考慮すべきであろう」とも定義されている。この最後の部分も1990年代には時代遅れの愛国主義と見られ、修復を契機に全く新しいコンセプトのもとに展示品再編を強調する理由の一つになった様であるが、20世紀初頭の創立時期としては、このような殖産興業の意味合いの包含は無理からぬことであつたろう。しかし、その一方で技術専門書から産業・工業技術に関する歴史書、また貴重な古文書・古資料は現在10万冊を越え、その当時の収集努力が実り産業技術博物館の図書類のコレクションは非常に高い評価を得ている。

1909年には「工業と産業の為の技術博物館協会」が設立され、それは組織統一会員総会や責任者として或いは執行機関の首脳陣とする理事会をもとに構成、かつこの首脳陣の傍らには審議会として専門法律顧問団が存在し、また約900人に及ぶ会員は学問、工業、産業、の各界並びに国の行政からの代表者で構成されていたとある。

ウィーン産業技術博物館の1968年度年報『Blaetter fuer Technikgeschichte (科学技術史の

雑誌)』掲載のM. ハーバッハー (Habacher) 女史の論文によると、博物館設立目的の寄付の呼びかけに応じて1909年8月末迄に、730人の寄付者から合計で2,777,850クローネが集まった旨と10,000クローネ以上の献金を行った48人、これは全体の6.5%に当たるそうであるが、氏名が記されている。その中には個人名の他に、今日でもカフェ等で使用されている実用的でありながらその洗練されたフォルムが有名な「トーネットの椅子」で知られるトーネット兄弟社を始め、多くのウィーンを中心とする企業名と並んで、プラハ鉄道産業、プラハ機械建設、北ボヘミア石炭工場会社ブリュクスやトリエステ技術研究所といった名称も見られ、当時のドナウ帝国を彷彿させる。しかしながら、それでも目標にはなかなか遠く、結局資金上の理由から残念ながら当初の建築計画の3分の1に縮小され、翌1910年6月に建築が開始された。1912年末に完成をみた建物の基本構造は、オーストリア内で最初の鉄筋コンクリート建築会

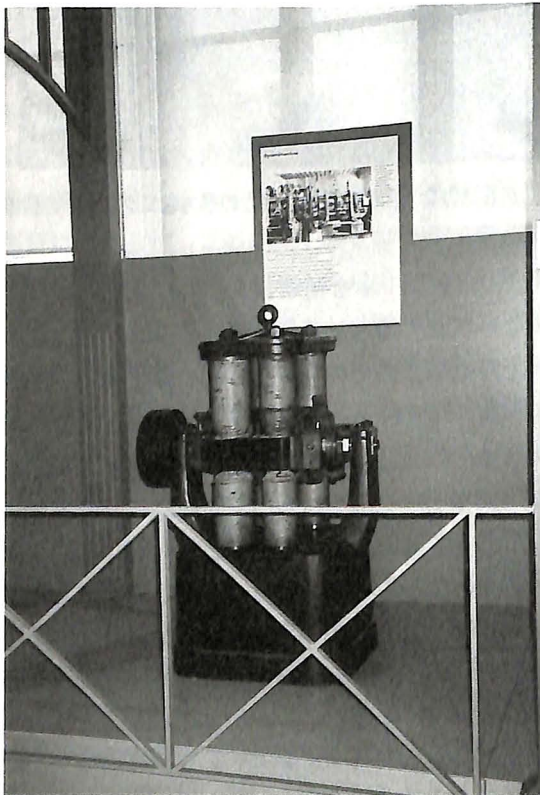


写真4 企業家クルップの寄付したグラム発電機

社の一つが担当したそうである。初代の館長にはルートヴィヒ・エアハルト (Ludwig Erhard, 1863-1940) が抜擢され1913年から1930年まで務め、彼は特に収集品の調達とその整理に貢献したと記述されている。既に1912年に基本的な収集品本体は公的に引き継がれ、1914年に博物館内に引っ越してきたのは、衛生博物館、工業技術展示室、オーストリア仕事歴史博物館、製塩局 (製塩に関する博物館か?)、帝国測量調停委員会所有の収集品、農業組合の模型収集品、帝国鉄道歴史博物館、帝国郵便博物館で、最後2つの帝国博物館に関しては1980年まで独立した管理体が存在していたそうである。これらの博物館の展示品は同年中に展示室内に配置が開始されたという。地上階は交通運輸関係、1階は (日本式の2階にあたるが) 様々な産業部門に費やされ、その上の階は橋梁建築と測定関係部門の展示がなされたとのこと。特筆すべきは地下の「鉱山ショー」であろう。実際の坑道を模した体験型展示であるが、これは今尚、当時の設備に修復を施しながら使用しており、多くの人々にその工夫された過去の鉱山技術と当時の厳しい労働条件の両面から深い印象を与えている。戦後、20世紀後半の発展近代化した坑道の様子 (国内の具体的な炭鉱の一部を模した展示) が追加され、現在は1970年以降にトンネル掘削などで使用された掘進機も2台併設、その稼動状態も若干見ることが出来ることから、取り分け子供達には人気のある展示の一つとなっている。

1912年から始まった展示室内の準備にはかなりの時間が費やされた。その間に第一次世界大戦の敗戦も経験することになり帝国は領地の大部分を失い小共和国となってしまった。博物館にとっても厳しい時期であったが、既に数年が経過している事から、エクスナーは出来るだけ早く開館するように要請したらしい。この時、彼は既に70歳を越えていたので、少しでも長く館の運営状態を確認したかったのであろう。1918年5月6日、まだ最終的な準備が整わないうちに、特に式典も行わず博物館の門が一般の人々に開かれる事になったと言う。H. ブルガー (Burger) 女史著の『Maschinenzeit Zeitmaschine (マシン時代・タイムマシン)』には、1988年5月6日に博物館前のマリアヒルファー通りにおいて、産業技術博物館「開館記念セレモニー」が行われた旨が記されている。仮開館とも言えるその当時の一般公開日から、ちょうど70年後にあたるこの日、人々はその博物館設立時の困難さに思いを馳せたに違いない。暫定的に開館した博物館は、その後も費用や人員不足から展示室の整備は段階的に行われ、完全な展示面積を披露するに至ったのは結果的に20年間で費やしたとのことである。しかし、そのような苦境の中においても、博物館は一般市民の為に1919年11月から土・日曜に公開講座の開設に踏み切ったことがブルガー女史の著作から分かる。具体的なプログラムが掲載されていたので、その部分を抜粋紹介すると、まずタイトルは『産業技術博物館における国民教養講座』と邦訳できよう。その下に博物館の所在地、更に「1919年12月のスライドとフィルムによる講演」という大きな文字が目に入る。午後4時から始まる土曜日の題目は「技術実験制度、電流の発電と利用、高山鉄道、地下鉄」が並び、また日曜日の午前10時からの標題は「原動機、自動車、新しい飛行機、船はどのように造られるか」。いずれも一日一講座で当時の最新科学技術に関連したテーマを取り扱っているようであり、もちろん講演者名も明記されている。博物館は、国民の教育形成の一端を担うことを使

命として感じその活動を惜しまず、特に1930年代には多くの講習会や講演会が開催されたようである。その一方で、館長エアハルトの下「オーストリアにおける科学技術史の研究所」構想が練られ、彼の仕事の一つとして1931年7月1日から差し当たり自主的な協力者と共に科学技術的資料の管理が行われていったようである。それらも含む収集・研究活動の結果は1932年から『科学技術の歴史の雑誌』として、1939年からは『科学技術史の雑誌』（前出）と名称を若干変更し年報として今日に至っている。最初は協会の責任管理下にあった博物館は、1922年に国有化され商工業省のもとに置かれる事になり、この頃から博物館の発展に政治的・経済的出来事の影響が強くなったと案内書にある。1931年には草創期の最大の功労者であったエクスナーもこの世を去り、世の中はまた戦争の暗雲へと次第に引き込まれて行くことになるのである。

以上、ウィーン産業博物館の成立過程を垣間見て来たが、それ以降の様子もごく簡単ではあるが記しておきたいと思う。1938年からのナチスドイツによる併合時期はその組織下におかれ、産業博物館は自然史博物館・民俗博物館と共にドレスデンの動物学博物館の館長であったクンマーレーヴェ（Kummerloewe）が管理することになったが、それもごく短期間であったらしい。高価な展示品は1939年から1945年の戦争中には安全な場所に移され保管されたが、博物館自体も幸い殆ど被害を受けなかったので展示品も疎開先から戻り、終戦後半年経つか経たない内の1945年10月14日に他の大きな国立博物館に先駆けて再び開館した。その後1980年代までは若干の展示面積拡張はあったものの簡単な修復に留まっていたが、建物の傷みが激しくなり総合修復の為閉鎖されるに至ったことはこの拙稿の冒頭部分で既に触れた。1999年に再び新装のもとに開館した当該館は、それに先立って1998年4月に写真を多く掲載したカラフルな装丁で一種の宣伝用と思われる44頁の少冊子を出版しているが、その外題及び内題には「Das Technische Museum Wien」に続いて「Ein Museum entsteht neu（一つの博物館が新しく生まれる）」という一文が強調されており、内容も含めて「新生」を謳っている。また2000年1月1日から、これは1998年の連邦博物館法に基づくものであるが、「連邦共和国の公的権利を所有する独立した学術的施設」として、一般には民営化と言われているが政府の管理行政の下から離れた。新コンセプトのもと、それまで30余りに分かれていた収集品グループは展示計画も含め、現在以下の6グループになっている。1. 科学技術的及び自然科学的基礎 2. インフォメーション及びコミュニケーション技術 3. 鉱山学、機械工学及び電気工学 4. 手工業及び工業的製品技術 5. 交通関係 6. 建築・日常・環境技術

現在は初の女性館長が就任して7年余りが経過しており、また工業科学分野外からの初めての就任でもあることから、展示室に現代芸術を取り込むなど館内に新しい風を吹き込んでいる。2005年には台所機器からヘア・ドライヤー、ごみ収集容器に至る日常製品の変遷展示の一角が新しく登場し、最近では人体及び健康計測機器などを扱った新展示室もオープンしている。また科学技術の進歩に伴い最先端技術やメディアに関する展示、その他風力発電など代替エネルギーに係わる展示などで、限られたスペースは常に不足状態のようである。致し方ないが創立当時の展示品が次第に姿を消しつつあるのは残念な事である。前回2004年の見学時に、1901年当時の

ウィーンのある乳製品製造所を再現した模型が非常に優れていたのでは是非もう一度見たいと思っていたが、残念ながら現在は収蔵庫に収められているという。その細部に至るまで緻密に製作された模型は傑作と呼ぶにふさわしいだけでなく、この他にも同様に当時の工場の様子をよく映した数点の模型も含めて、何れも畳1帖ほどの大きさであるが、その内部の設備のみならず当時の社会状況も垣間見ることができ、歴史的意義も持ち合わせているような印象を受けた。また、現在は建替えられてしまった帝国時代の駅舎、中には宮殿を思わせるような建築もあったが、それらの模型等も館内外の特別展時に鑑賞の機会を得るくらいである。当館は大収蔵庫をウィーン市内に2ヶ所、所有していると聞いているが一般には公開されていない。エクスナーが産業技術の歴史も重要視していた事は既に述べた如くであるが、分館の新設が待たれる。また、蒸気機関車などの大型展示品に関しては修復中にその取り扱いが度々検討され、それらの処遇の決定に窮していることが1996年当時の『Die Presse』紙11月28日付け記事で報じられていたが、結局1999年にその多くを鉄道愛好協会の一つである「最初のオーストリア市電・鉄道クラブ（Der erste oesterreichische Strassenbahn – und Eisenbahnklub）」が組織する鉄道博物館「Das Heizhaus Eisenbahnmuseum Strasshof」に委託し、提携博物館関係を結び現在に至っている。

今日、館内において草創期の苦勞を知るよすがとなるものは殆ど無い。記念講堂外壁に尽力者刻銘の大理石版があり、前回写真に収めたのでそれを紹介するつもりであったが、その間にオリジナルではないと言う曰くつきとなってしまう、この国特有の複雑な政治問題が絡んでいるゆえ差し控えることにした。唯一エクスナーの胸像があるが、昔の正面玄関を入った処は現在では既述したようにカフェ・レストランとなってしまった。胸像は移動されることなく現在その内部に位置している。来館者の殆どが気にとめる様子も無く、その台座に予約席札などが置かれているのを見るに付けても時代の流れを感じざるをえない。クルップ始めその他、特に尽力した7人に関する手掛かりは殆ど見つけ難い。2004年にはドイツ博物館も訪ねたが、ミラーを中心とする設立時期に関する記念展示室があり、そこではコンピューターなどの最新技術も導入され当時についての様々な情報が提供されていた事を思い出す。特に草創期の一言では語れない苦勞を知った後では、先駆者の努力も



写真5 中央ホール内の展示

語り継いでいきたいものであると強く感じるとともに、次回見学時には設立からの歴史が分かる一隅を発見できると期待している。

尚、参考資料の中には辞書にない特殊なドイツ語表現や単語も少なくなく、独文専攻でもない浅学の筆者に誤訳の危険性が無いとは言えず、気に掛かる部分も処々あるが、ウィーン産業技術博物館の成立事情とその草創期の苦労や状況を概観する機会を得たことから、是非紹介したいと思ひ筆を執った次第である。今後も更に読み進んで行きたいと思っているので、誤りなどに関し御叱正を賜れば幸いである。

最後に、本稿の執筆にあたり資料を紹介して下さいましたウィーン産業技術博物館資料室のCamilleri女史、並びに本誌『博物館学雑誌』への投稿を勧めて下さいました明治大学文学部教授の矢島先生に心より御礼申し上げます。

参考文献

- 『TMW Technisches Museum Wien』(2002): Prestel-Verlag, Muenchen・Berlin・London・New York
『Das Technische Museum fuer Industrie und Gewerbe in Wien』Selbstverlag des Arbeitsausschuss des Technischen Museums fuer Industrie und Gewerbe in Wien
(発行年月日は明記されていないが1908年8月以降と思われる)
- Habacher, Maria 論文『Das Technische Museum fuer Indudtrie und Gewerbe in Wien. Von seiner Gruendung bis zur Verstaatlichung. 1907-1922』(『Blaetter Fuer Technikgeschichte』30. Heft (1968): Wien Springer-Verlag・1968に掲載)
- Burger, Hannelore (1991): 『Maschinenzeit Zeitmaschine. Technisches Museum Wien 1918-1988』Wien 1991 edition TMW
- 『Das Technische Museum Wien. Ein Museum entsteht neu』(1998) Edition TMW 1/1998
- Muschik, Peter: 『BERNDORF Spuren von *Krupp und Kaiser*』Herausgeber und Verleger [„Unser Lebensraum“ Natur - Kultur-Wirtschaft] 2560 Berndorf, Gedruckt mit Unterstuetzung des Kulturamtes der NOE-Landesregierung
(発行年月日は明記されていないが1989年5月以降と思われる)
- Riedl-Dorn, Christa (1998): 『Das Haus der Wunder. Zur Geschichte des Naturhistorischen Museums in Wien』Verlag Holzhausen, Wien
- [W.F.Exner: Karriere in der Gruenderzeit, Portraet](TUEV<http://www.tuev.at> (2007年2月検索))
- [Wilhelm Exner aus Wikipedia, der freien Enzyklopaedie]<http://de.wikipedia.org/wiki/Wilhelm-Exner> (2007年2月検索)

(尚、本文の全内容については2007年2月末における資料及び当該博物館の状況をもとに記述しております。また、本文並びに参考文献に現れるドイツ語単語中のA, aウムラウトはAe,

ae、O, oウムラウトはOe, oe、U, uウムラウトはUe, ue、エスツェットはssと表記しました。)